

論文番号	6 (第 10 回研究会 2012.11.24 於青山学院大学)
タイトル	措定文の理解に関わる要因
著者名(所属)	吉田 愛 (ニューヨーク市立大学大学院センター)
連絡先 Eメール	myoshida37@gmail.com
<p>1. 背景および研究目的</p> <p>「NP<sub>1</sub>はNP<sub>2</sub>だ」のような、2つの名詞句からなる主題構造は、主題(NP<sub>1</sub>)が指示する指示対象について、述語名詞句(NP<sub>2</sub>)でその属性を表す措定文である。主題名詞句と述語名詞句との関係によって、(1)(2)のような2種類のタイプが存在する。Type I 措定文のように、主語名詞句と述語名詞句との関係が明らかでない場合、文の意味は通常、それ自体では不明である。</p> <p>Type I (1) 田中さんはまんがだ。 Type II (2) 田辺さんは弁護士だ。</p> <p>先行研究では主に Type I について、文自体の構造の解明に着目した研究や、文が使用される自然発話のコンテキストに注目した研究がなされてきた。(奥津 1978、北原 1981、池上 1981、坂原 1990、Obana 2001 など) Type II の措定文については、これまでこうした研究の対象になることはほとんどなかったが、コンテキストによっては、主題名詞句と述語名詞句が同一の意味対象を指示しない意味に受け取れることも可能である。本研究は、条件を制御した実験的コンテキストにおける措定文の理解度を調査することによって、コンテキストが措定文の理解に影響を与える具体的な要因の解明を目指す。これら両タイプの措定文の理解がコンテキストによってどのように変化するかを調査することにより、このような主題化構造の文とコンテキストとの関係について明らかにすることが究極の目的である。</p> <p>2. 調査方法</p> <p>2. 1. 予測</p> <p>Type I 措定文には二つの名詞句をつなぐ動詞がないことから、主題名詞句と述語名詞句を結びつけることができる動詞を補えば、文を理解することが可能であると仮定できる。Type II 措定文は、通常は単独で意味的に完結したものとみなされるが、その意味を損なう可能性のあるコンテキストや、また Type I と同じく文の表面に現われない要素を含むことを示唆されるようなコンテキストにおいては、異なる意味に受け取れる可能性を示し、理解に影響が出ると仮定した。</p> <p>2. 2. 実験センテンスペア</p> <p>ターゲットとなる措定文には、すべて先行するコンテキスト文が与えられ、それぞれのコンテキストにおける理解度を5段階(1-まったくわからない、5-とてもよくわかる)で評価してもらった。</p> <p>Type I コンテキスト条件</p> <p>統語関係 (+場所フレーム)</p> <p>C: 鈴木さんは(本屋で) <u>立ち読みした</u>。 T: 田中さんは<u>まんがだ</u>。</p> <p>非統語関係 (+場所フレーム)</p> <p>C: 鈴木さんは(本屋で) <u>手伝った</u>。 T: 田中さんは<u>まんがだ</u>。</p> <p>意味関係 (+場所フレーム)</p> <p>C: 鈴木さんは(図書館で) <u>読書した</u>。 T: 田中さんは<u>恋愛小説だ</u>。</p> <p>非意味関係 (+場所フレーム)</p> <p>C: 鈴木さんは(図書館で) <u>座った</u>。 T: 田中さんは<u>恋愛小説だ</u>。</p> <p>Type II コンテキスト条件</p> <p>ターゲット文のみ</p> <p>T: 田辺さんは<u>弁護士だ</u>。</p> <p>矛盾</p> <p>C: 田辺さんは<u>弁護士資格を剥奪された</u>。 T: <u>田辺さんは弁護士だ</u>。</p> <p>動詞の省略</p> <p>C: 石山さんは会計士を<u>探している</u>。 T: 田辺さんは<u>弁護士だ</u>。</p>	

#### ダブル・省略

C1: 畑山さんは税理士を探している。 C2: 石山さんは会計士を探している。

T: 田辺さんは弁護士だ。

#### ダブル・状況

C1: 石山さんと田辺さんは誰かを探している。 C2: 石山さんは会計士を探している。

T: 田辺さんは弁護士だ。

### 2. 3. 被験者

日本語を母語とする大学生、大学院生、社会人 (Type I 112 名、平均年齢 24 歳、Type II 50 名、平均年齢 28 歳) が実験に参加した。

### 3. 結果

#### 3. 1. Type I 指定文の理解度

表 1 統語関係の 4 条件における理解度の平均値と標準偏差

条件	統語 (n=12)	非統語 (n=12)	統語+場所フレーム (n=12)	非統語+場所フレーム (n=12)
理解度	3.06	1.55	3.41	2.20
標準偏差	.62	.38	1.07	.48

表 2 意味関係の 4 条件における理解度の平均値と標準偏差

条件	意味 (n=16)	非意味 (n=16)	意味+場所フレーム (n=16)	非意味+場所フレーム (n=16)
理解度	3.02	1.81	3.07	2.59
標準偏差	.91	.58	.73	.84

#### 3. 2. Type II 指定文の理解度

表 3 Type II 指定文の 5 条件における理解度の平均値と標準偏差

条件	ターゲット文 のみ (n=10)	矛盾 (n=10)	動詞の省略 (n=10)	ダブル・省略 (n=10)	ダブル・状況 (n=10)
理解度	4.99	1.5	3.2	2.39	3.32
標準偏差	.03	.53	.49	.38	.49

### 4. 考察

Type I 指定文においては、先行するコンテキスト文に含まれる他動詞、自動詞と述語名詞句 (NP<sub>2</sub>) とが統語、意味的に結びつく関係にある場合、指定文の理解度は高くなった。読み手はこれらの動詞をコンテキストから補って、意味を理解しようとしていると考えられる。また、先行する他動詞、自動詞と統語、意味的關係が見られない場合に、指定文の二つの名詞句が構成要素となりうるような特定の場所を表すフレームが提示された場合、指定文の理解度は、場所フレームがない場合に比べて高くなった。

Type II 指定文は、二つの名詞句が意味的に同一の対象を指示していない可能性を示唆するコンテキストにおいては、いずれも理解度が低くなった。これは文の意味に曖昧さが生じるからと考えられる。また、Type I 指定文のように、文自体に省略を伴っている可能性を、2つのコンテキスト文によって示唆しているコンテキストでも必ずしも理解度を高める効果が見られないことがわかった (ダブル・省略)。これは、コンテキストの情報量が増えただけでは、必ずしも文の理解を助けることにはならないことを表している。

### 5. 結論

Type I、Type II の 2 種類の「NP<sub>1</sub>はNP<sub>2</sub>だ」指定文の様々なコンテキストにおける理解度を調査した結果、両タイプの指定文ともにコンテキストの条件によって理解度に違いが生じた。コンテキストはどのような文の理解にも影響を及ぼしうるものであり、聞き手はコンテキストの中の様々な言語的情報を利用して、文を理解しようとしていると言える。